

地域における子ども・若者支援実施研究事業

一般社団法人 なら人材育成会

〒635-0121 奈良県高市郡高取町大字丹生谷122-2

助成事業の概要

(1) 事例検討会・・・当団体における日々の実践を振り返り、社会福祉学・教育学・心理学など子ども・若者支援に関わる領域の講師によるスーパービジョンを受けながら、専門性の向上と事例について深めていくことで実践知を蓄積していくことを目的として開催しました。

年 8 回 実施場所 三宅町解放会館ほか 2 件
講師 大林裕典 (スクールカウンセラー・臨床心理士)
中東輝幸 (スクールカウンセラー・ひきこもり相談窓口相談員・臨床心理士)
井上恭兵 (障がい者支援関連県講師)

研修参加者数 延べ 69 人

(2) セミナー開催・・・不登校やひきこもりの子ども・若者に関わる支援者やその両親など当事者に向けて地域・家庭での支援の在り方を考える目的で実施しました。

年 1 回 8 月実施 場所 高取町商工会 参加者 21 人

(3) 実践事例集の作成と配布

不登校やひきこもり、障がいのある方など子ども・若者の支援をおこなっていく中で、よりよい支援ができるように共通の基盤となる研修体系の提案とその事例集をまとめたハンドブックを作成

しました。編集には、臨床心理士のアドバイスを受けるともに、県ひきこもり窓口を担当する行政にも協力を得ました。

100 部作成し、県内の支援機関や当事者家族に配布しました。

事業の成果

事例検討会では、直接支援に関わっている人たちや問題意識を持たれている機関に呼びかけ実施しました。事例検討会では、関わりを持つ引きこもりや不登校の方の状況を出し合い、支援者としての考え方を自由に提案してもらいました。専門家がコーディネーターとなり、内容の整理を行ってもらいました。見立ての方法、支援の在り方、精神障害者の方や発達障害者の方の障害の特性や理解などの学習会を行ってきたところです。その中で、支援者として回復の流れはゆっくり進んでいくことと寄り添う支援者が長く見ていくためには、確認されたことは、不登校・ひきこもり状態はそれぞれ違い、1 人の成功があってもすべての人に当てはまるものではないことを学びました。参加者からは、「関係を遮断している人との信頼関係構築には時間がかかる」、「本人のニーズが読み取れない」、「相談が途切れてしまう」、「マッチする社会資源が不足しているなど」との声も多く上がり今後の課題もあかりました。ひきこもりや不登校への対応については、家族、本人への理解と共に、幅広い年代層、多様な状態像に即した支援が求められていることを確認しました。支援者の基本姿勢として、成育歴や家

族関係の聞き取りを丁寧にする、本人との関係づくり、本人のニーズの確認を優先させること、関係機関と情報を共有すること、本人の来所を求めない、家族の相談だけでも大丈夫であることを伝えること、本人の変化等にあわせて対応を一緒に考えていくようにする、本人の困っていること希望していることからアプローチする、スモールステップを心がける、家族が相談に来た場合は、これまでの苦労を労うよう心がける、本人が相談に来た場合は、本人の思いに共感を示すことを心がけることを確認しました。

今後も都度、学習会や検討会を実施していく必要性を感じました。

セミナーの開催では、今回は不登校の理解を求めるためのセミナーを行いました。当事者の家族や学校の先生方もきていただきました。講師には、不登校経験者であり心理士である大林氏には、当時の自分とかわっている子どもたちの事例を話し、進行役に心理士の中東氏に担ってもらいました。会場からは、自分の子どもが不登校どう接したらいいのか不安な心情が語られたり、講演後はトークセッションができるよう工夫してもらいました。セミナー終了後にも、心理士2人と会場参加者との話が盛り上がっていました。まだまだ、生きづらさを抱える人にとっては、偏見や甘えなどという見方はあります。こうした意識に苦しんでいることを多くの方に知ってもらうことが、彼ら彼女らにとってより生きやすくなる基盤づくりができるきっかけになることと、地域社会を見直すものになってもらえるのではないかと感じました。世間では8050問題など関心ごとになっている時期でしたのでよりよく身近な問題として取り組みが行えたと思います。

実践事例集は、多くの方に配布しました。元当事者の方の文章や活動事例、奈良県内の支援機関情報を掲載してきたところです。掲載にあたり支援機関や行政とのやり取りを行うことで、当法人

としても各団体との連携を深めることができました。

成果の広報、公表

さまざまな背景で生きづらさを抱える子どもたちや若者にとって、支援者の関わり方や地域住民や親などの接し方はよりよいものにしていく必要があります。まだまだ、不登校やひきこもりに関する研修事業が少ない中で、支援者としてどうあるべきか振り返る場所がありませんでした。今回この事業で、コロナ禍で予定した回数は減りましたが、事例検討会・セミナー開催・実践事例集作成を行う中で、支援者や親御さん、地域の方々にとっても学びの多い取り組みができたと考えています。

生きづらさは100人それぞれで支援の仕方もそれぞれです。不登校やひきこもり支援を行う機関も団体もそんなに多くはありません。研修体系をつくることで、多くの方々が理解し、まだまだ不十分な支援体制を構築するためにはこうした継続した取り組みが必要であると改めて感じました。

ひきこもり支援には特有の困難さがあり、専門的なノウハウが必要とされている。

今後は、支援技法の開発、向上をはかること、支援窓口をわかりやすく示すこと、当事者家族との連携協働により、早期支援やいわゆる8050問題に対応していくことなどが必要であると考えています。

今後の展開

今後も支援者のスキルアップのための研修会や親の会を定期的に行っていきたいと思います。

現在、コロナ禍によって集団での集まりが困難であるため、感染予防を徹底した開催やオンライ

ンを通じた開催も検討しています。

また、本人が動き出したときの場づくりとしてこれまで実施してきた居場所の充実を図り、社会での接点を持つ仕事体験の場をステップアップ方式で実践していきたいと考えています。

最近高年齢化した引きこもりの方々の相談が多く、現在就労訓練の場を提供しています。就労だけでなく生活基盤の安定などまるごと支援が求められるようになりました。当法人だけで抱え込むのではなく、関係機関とのネットワークを構築させたチームでの支援体制行いたいとおもっています。中々制度の間の方が多く、行政も巻き込み新たな支援を地域で作り出せるよう実践活動を行いたいと思います。